

奈良・藤原京右京五条四坊

1 所在地 奈良県橿原市小房町

2 調査期間 第一次 一九九一年(平3)十一月～三月

第二次 一九九二年二月～一九九三年一月

3 発掘機関 橿原市教育委員会

4 調査担当者 竹田政敬

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 七世紀～一三世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



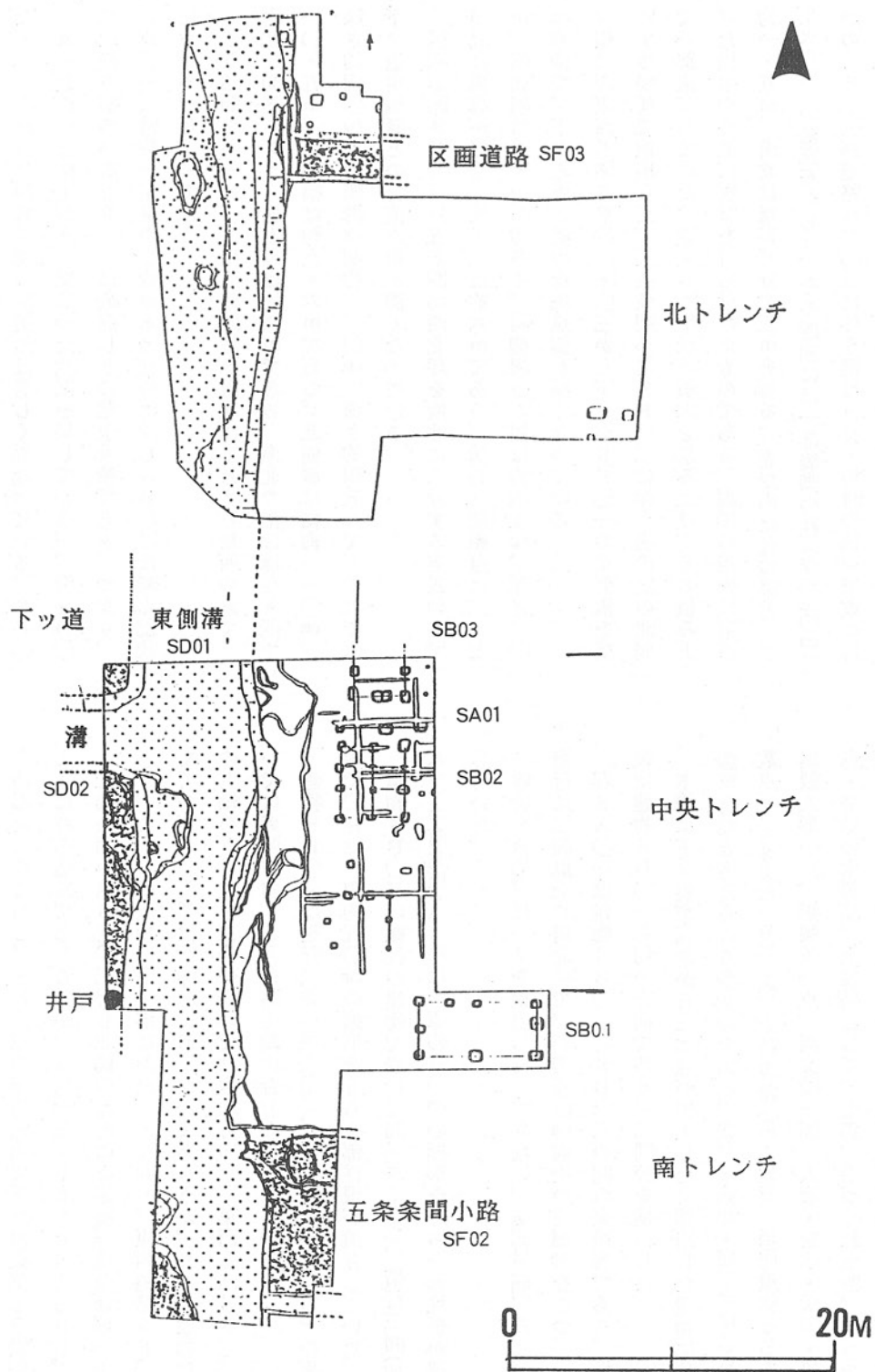
(桜井・吉野山)

今回の調査は「万葉ホール」(仮称)建設事業に伴う事前発掘調査である。調査地は復原条坊によるところの藤原京右京五条四坊内にあたり、古代の幹線道路下ッ道(現代では国道一六九号線として吉野に至る界内の主要道路)に東面する位置であり、下ッ道と五条条間小路の交差点の検出が予想される場所である。

下ッ道についてはその東側溝が一九八八年奈良国立文化財研究所による七条四坊内の調査で検出されており、調査当初からその存在は確実視されていた。また、五条条間小路についても一九八七年奈良県立橿原考古学研究所と当市教育委員会が共同で実施した四条大田中遺跡(大藤原京右京五条五坊内)の調査区内に入っているのではないかと議論があり、今回の調査はその可否を決定しうる地点として注目された。

調査の結果、藤原宮期の遺構としては下ッ道及びその東側溝、五条条間小路、更に五条四坊西北坪内を南北に二等分したと考えられる東西に敷設された区画道路がある。そしてこれら道路と下ッ道とを結ぶ橋二脚、下ッ道に直交する溝一条、掘立柱建物三棟、柵列一条がある。

下ッ道SF〇一は中央から南トレンチにかけて東路肩一部を確認しただけで、路面幅は不明である。南北溝SD〇一はその東側溝である。検出長約八一m、幅は中央より北側にかけては氾濫のため不揃いであるが、遺存状況の良いところではほぼ七m前後に収まり、本来の幅は七m前後になると考えられる。深さは検出面より約八〇cm～一二〇cmを測り、北に向かうにつれて次第に深くなる。溝内堆積土は概ね四時期からなる。また、溝SD〇二は検出長は僅かに二mに留まるが、東側溝SD〇一から路面を横切るものである。幅約五m、深さは八〇cmを測り、流水は土層堆積状況から、西流してい



五条四坊遺跡平面図

たとえられる。両者の溝の堆積土は著しく異なっている。SD〇一は大量の砂と粘土が入り交じった状況を呈しているが、溝SD〇二は最下層の砂層を除いては砂混じりの粘土堆積である。つまり、SD〇一は常時一定量の水量があったのに対しSD〇二は澱んだ状態であったと推測できる。

五条条間小路SF〇二は五条四坊を南北に二分する東西の路で、南北に側溝が伴う。検出長は約四mである。南北の幅は溝心々間で一〇・五m、路面幅は約九・六mである。北側溝は幅約一一〇cm、深さ約四〇cm、南側溝は幅約一二〇cm、深さ約四五cmで、それぞれ下ッ道東側溝との合流点側が深くなっている。

区画道路SF〇三は五条四坊西北坪を南北に二分する東西の路で、南北に側溝が伴う。検出長は約六mである。溝心々間距離は二・七m、路面幅は二・一mである。両側溝とも幅は約四五cm、深さ三〇cm前後で、下ッ道東側溝の合流点側が深くなっている。

橋は両東西道路SF〇二・〇三から下ッ道SF〇一の東側溝を横断する場所で検出した。五条条間小路SF〇二に伴う橋は路の北側で一部遺存していた。逆「コ」字状に横木を積み上げ、その積み上げた横木の外側に板材を打ち付けたものである。護岸の規模は東西約一・五m、南北は遺存部分で三mを測る。護岸内には榛原石（室生火山岩）の基底石があり、その西側には一部橋脚の柱（径約二〇cm）がのこる。区画道路SF〇三に伴う橋は丸材・角材の杭を無数に打

ち込んだものである。SF〇三の西延長上で下ッ道東側溝を横切るように打ち込んだことから橋に関連するものと考えられる。

五条条間小路SF〇二より北側の坪内には建物三棟及び堀一条がある。これら構造物は南半部にかたよっており、東西道路SF〇三までの間の北半部は空閑地であったのであろうか。また、建物はその主軸を下ッ道SF〇一沿いでは南北方向に、東西道路SF〇二沿いでは東西方向、と各道路主軸に合わせ配置している。

建物SB〇一は梁行二間（三・六m）、桁行四間（七・二m）の東西棟で、柱は一辺約五〇cmの掘形をもち一部柱根が遺存していた。

建物SB〇二は総柱の建物で梁行二間（三・九m）、桁行三間四・八m）の南北棟で、柱は一辺約六〇cmの掘形をもち一部柱根が遺存していた。

建物SB〇三は一部を検出したにすぎない。梁行二間（三・二m）、桁行は二間以上の南北棟で、一辺五〇cm前後の柱掘形をもつ。

堀SA〇一は建物SB〇二とSB〇三の間の東西堀である。堀の軸は建物SB〇一と同一方向である。二間分を検出した。

木簡は下ッ道東側溝から三七点が出土した。伴出した遺物には、藤原宮期と考えられる多量の土器（須恵器・土師器・甕）をはじめ硯数点（うち多彩釉一点、瓦、木製容器（皿・曲物）、祭祀遺物として金属製人形一点、銅製鈴一点、素文鏡一面、人形・斎串・太刀・馬・鳥・舟等の木製品、土製品として、土馬、手づくね土器、ミニチュ

この他、下ッ道東側溝上面から延喜通宝一点、また、廃絶後路面に掘られた曲物の井戸の底より黒色土器皿一点と土師器皿片一点が出土した。

第一次調査では南トレンチと北トレンチ、第二次調査では中央トレンチの発掘調査が行なわれ、下ツ道東側溝から総計三七点の木簡が出土した。その内訳は、南トレンチ一二点、北トレンチ一七点、中央トレンチ八点である。

第一次調査で出土した木簡のうち、主要なものについては、木簡学会第一四回研究集会で報告した。第二次調査で出土した木簡については、奈良国立文化財研究所の橋本義則氏が釈読された。また第一次調査で出土した木簡に関しても、今回、橋本氏と和田の二人で再検討を加え、釈文を確定した。そのため昨年の研究集会で発表した釈文と若干相違するところもあるが、以下の釈文によられたい。

(1) $\lceil \vee \text{七斗俵} \rceil$ $(130) \times 27 \times 4$ 039

(2) 「坂田^{〔評力〕}□長岡里秦人□人□□^{〔古力〕}」

「裏」 161×17×4 051

(3) $\times \square$ 評史 $(80) \times 14 \times 2$ 059

(4) $\begin{matrix} \bullet \\ \square \\ \square \\ \square \end{matrix}$ $\begin{matrix} \square \\ \square \\ \square \end{matrix}$ $\begin{matrix} \square \\ \square \\ \square \end{matrix}$ $\begin{matrix} \square \\ \square \\ \square \end{matrix}$

$(629) \times (37) \times 7$ 081

(5) 肆 賀賢
× 惠悲宗賀

× 長 卯
[真] □ 倍
[力] 心 阿
□ 何

(92) × (32) × 2 081 *

(6) 「(符籙)今戌日死人」
162×40×7 011*

(7) $\left[\begin{array}{c} \text{酒三升} \\ \text{合方} \end{array} \right] 150 \times 17 \times 5 \quad 032$

(8) 「間カ申^レ里奉出加山」

・「>」部□□□□ 125×16×5 032 *

(9) 「>」不鞍河原□□^{「俵カ」}卷斤> 127×17×4 031 *

(10) 「 鳥鳥道背背□□□□」 173×33×4 011

三 中央トレンチ

(11) 「〔符籙〕鬼急々如律令 (241)×43×4 019

(12) 「別君意伎万呂米一俵」 149×20×4 011

(13) 「>」石井前分贄阿治」 146×21×6 032

釈文の作成にあたっては、いずれの木簡も、最終的に赤外線テレビカメラによって、墨痕・運筆を確認した。以下、観察所見と簡略な解説を加えたい。

(1)の頭部は圭頭状である。物資の数量を「俵」で示す例として、米・白米のほかに、柏(櫛)や大豆がある。

(2)の頭部は刀子で整形を加え、やや円みをもたせている。三字目は「評」の可能性が大きい。しかし第一画や旁からすると、「郡」である可能性も少しは残っている。

『和名抄』に近江国坂田郡長岡郷がみえ、滋賀県山東町長岡付近にあたる。平安初期に作成された坂田郡関係の土地売買券文が数点

残っており、大原郷・長岡郷・横川駅家に秦氏、大原郷にはさらに秦人の分布が認められる。数量を「裹」^{「マツ」}で示すものに、玉類・裹飯^{「マツ」}などがある。

(3)は下端部を尖らせているので、文書木簡ではないだろう。伊場木簡に「□評史川前連」と記したものがあつた。『新撰姓氏録』に、評首・評連・郡忌寸・郡首がみえている。(2)と(3)は評制施行時の木簡である可能性が大きい。

(4)は長大な木簡で、裏面は天地逆に記す。表の二・三字目は、左側面が割られているので偏が不明。そのため読み切れないが、「甲皮」もしくは「伊波」の可能性がある。裏面の記載は、疫病流行などの事態と関わるものかもしれない。

(5)は習書木簡。表裏とも同筆で、優れた書風である。出典は未詳。(6)は厚みのある呪符木簡。頭部は圭頭状ではなく、刀子でやや斜めに整形している。下端部も尖らせていない。裏面は樹皮をはいだままの状態で、未整形である。表の上端部分中央と「今」のすぐ下に、薄く朱がみえている。

符籙の下に、中央に大きく「今」と書く。「令」ではない。「今」の下に右側に寄せ、「戌日死人」と記す。「戌の日に死ぬる人」とでも読むのであろうか。現状では、(1)とともに、最古の呪符木簡である。後にもふれるように、下ッ道で行なわれた「死のケガレ」を京外へはらう臨時大祓などに用いたものか。

(7)は腐食が甚しく、また墨痕も薄い。

(8)は申□里(申間里^{さま}か)からの貢進物付札。裏面の釈文が定まらなため、内容を的確に把握したい。表の「出加山」の三字は墨色が濃い。「奉」まで一旦書いて、筆に墨を含ませ、「出加山」と書き出したとみてよい。また「奉」と「出」の間隔は、他と比べるとやや空いている。こうした観察所見からすると、「申間里奉^{たてまつ}る。」と読むべきかと思われる。七世紀代の金石文では、「仕奉」「敬奉」「作奉」など、動詞に「奉」を添える敬語表現が一般的である。『法王帝説』には「奉渡」とする事例が例外的にみえるので、「出し加へ奉る」と読めなくはないが、その場合には墨色に問題を残すし、「奉る」のみで十分意が通じるにもかかわらず、わざわざ「出し加へ奉る」と持って回った表現となり、疑点がある。

『和名抄』やその他の史料によっても、申間里に該当する地名は見当たらない。裏面の「尔部」についても未詳であるが、藤原宮木簡に「大尔□^(反)」の事例があって、部と反はともに「へ」の甲類であること、また新潟県の場合遺跡出土の木簡に「をの尔へ」の事例があることから、「尔部」を賛とすることが可能だろう。そうすると、「出加山賛」となり、申間里から貢進された「出加山^{いっかやま}の賛」の意と解されるが、断定の限りではない。

(9)は上下端に切り込みのある〇三一型式で、(8)とは形式を異にするが、法量や書体には共通したものが感じられる。「不駿河原」の

四字は墨痕明瞭であるが、「駿」の読みが通らない。『大漢和辞典』にも「駿」はみえない。音符「俊」がつく俊・峻・峻・俊・俊・峻・峻・峻などはいずれも「ジュン」で、駿も同様かと思われるが、万葉仮名に音符「俊」のつく漢字はみえない。

ただ旁に「常」を用いた瑤・嫦・錦の呉音は「ジョウ」であり、駿を「ジ」に宛てた可能性が残る。類例に「盡」がある。「盡」の呉音は「ジン」で、「東国不盡河邊人大生部多」(皇極紀三年七月条)や、「不盡山」(『万葉集』卷三・三一七・三一九)では「ジ」と読ませている。そのほか『万葉集』では富士(山)を、不自・布自・布仕・布士・布時などと表記している。

『日本書紀』に、川原(飛鳥——)、川辺(迹太——)、河辺(飛鳥——、飛鳥寺西——、阿斗——、廬杵——、不盡——)などの表現が散見する。(9)は不駿河原で産出した物品一斤につけた貢進物付札で、人名や里名など、貢進主体を記さないのが特異である。天武・持統朝に山野や海を禁所とした事例がみえている。富士川下流域のように、流路が安定せず広大な河原を形成していた場所についても、その所有権や歴史的背景を考究する必要があるだろう。

(10)は習書木簡で、四字目から下は墨で薄く消している。『日本書紀』中巻第二話にみえる鳥の邪淫をめぐる説話が想起される。

(11)は符籙と呪句「急々如律令」を記した最古の呪符木簡である。上端部はやや圭頭状に整形されている。遺構面に突き刺さった状態

で検出された。もともと下端部を尖らせ、下ッ道東側溝の川辺で行なわれた祭祀に用いられたものとみてよい。符録は、「日」四字を三行に書き、その下に「魘」、「日」を横に三字、鬼を書く。

(12)は切り込みがない。別君意伎麻呂は初見。

(13)の「石井」は氏の名としての例はないので、地名かと思われる。『和名抄』に石井郷は、河内国讃良郡、摂津国武庫郡、山城国紀伊郡、安房国平群郡、下総国猿嶋郡、同海上郡、上野国碓氷郡、因幡国巨濃郡、伊予国周敷郡、同越智郡、同久米郡、豊後国日田郡にみえる。贊の阿治(鯨)に付けられた貢進物付札だから、石井は摂津国武庫郡石井郷の地か。持統三年八月に、摂津国武庫海一千歩内を禁所とし、守護人を置いている。「前分」は未詳。前後二回に分けて貢進した意か。裏面の切り込み部分に、紐の痕跡がある。

そのほか木簡ではないが、長さ二五・四cm、幅五・五cmで、上端部を半円形に整形した板材に、胡人かと思われる人物像を描いたものがある。

木簡のほぼ半数は付札や貢進物付札であり、習書木簡に達筆なものがあること、「佐」「神家」と記した墨書土器も出土していることから、藤原京右京五条四坊の下ッ道に面した一帯に官衙や貴族の邸宅が存在していたことをうかがわせる。

さらに多量の木製祭祀具(人形・斎串・馬形・鳥形・舟形・剣形など)や祭祀用の土器、(6)(11)の呪符木簡、金属製の人形、夾紵箱などが出

土している。これらの遺物は、七世紀末葉に下ッ道で国家的規模の臨時大祓や道饗祭が行なわれたことを示している。

六月と十二月の晦日に、朱雀門外で大祓が行なわれた。それに対し、即位式や大嘗祭に先立って、また疫病流行や大災害に際して実施された臨時大祓は、京極大路を舞台としていた可能性が大きい。疫病神が京内に侵入せぬよう、大祓と同日に道饗祭が京城四隅の道のほとりで行なわれた。長岡京では、右京五条の西京極に接した西山田遺跡で多量の祭祀遺物が検出されているので、臨時大祓や道饗祭は京城四隅に限定されることなく、京極大路で行なわれていたとみてよい。藤原京では下ッ道がそうした祭場の一つであった。

金属製人形や夾紵箱も注意される。大祓の当日、内裏では天皇、皇后、皇太子らが金属製の人形や荒世・和世と称する服にケガレを移し、河に流す御贖が行なわれた。大祓には木製の人形を用いるのに対し、御贖では金属製人形を用いる。下ッ道の東側溝は幅七mもあって、今回の調査地点から北流し、すぐ飛鳥川に注いでいた。金属製人形と荒世・和世を納めたかと思われる夾紵箱が検出されたことは、下ッ道とその東側溝が祭場であったことを示している。

藤原京造営の際の諸祭祀に関わる要素も指摘できる。調査地点の西側に下ッ道があり、その西方域は四条遺跡である。天武朝に新城の造営事業が開始された際、この地域に所在した数基の五世紀から六世紀代の古墳を削平して、整地を行なった事実が判明している。

その一基が四条古墳で、多量の木製埴輪の出土したことは記憶に新しい。古墳削平に際して、死のケガレを除く祭祀が行なわれたのだろう。また持統五年十月に行なわれた新益京（藤原京）の鎮祭は、各京極大路を祭場としたと思われる。

いずれにしても大宝令施行以前に、下ッ道の路上で国家的祭祀が行なわれていた事実は動かない。下ッ道がある時期まで、藤原京の西京極大路として機能していたことは間違いないと思われる。今回判明した事実と、近年、有力視されつつある大藤原京論とを、どのように整合させるのか、今後の課題と言えよう。

（1～7 竹田政敬・8 和田 萃）

木簡研究 第二〇号

巻頭言——木簡学会の十年——

一九八七年出土の木簡

原 秀三郎

概要 平城宮・京跡 興福寺勅使坊門跡下層 藤原宮跡 藤原京跡
藤原京左京九条三坊 紀寺跡 長岡宮跡 長岡宮・京跡 鳥羽離宮跡
千代川遺跡 矢谷遺跡 大坂城跡(1) 大坂城跡(2) 梶原南遺跡
宅原遺跡(豊浦地区) 長田神社境内遺跡 書写坂本城跡 砂入遺跡
杉垣内遺跡 清洲城下町遺跡 岩倉城遺跡 勝川遺跡 荻安賀遺跡
山中遺跡 小町一丁目一〇七番地点遺跡 宮町遺跡 川田川原田遺跡
光相寺遺跡 妙楽寺遺跡 釜淵遺跡 南古館遺跡 大楯遺跡
手取清水遺跡 角谷遺跡 横江莊遺跡 白环遺跡 草戸千軒町遺跡
延行条里遺跡 長門国分寺跡 安養寺遺跡 金光寺跡推定地 博多遺跡群(築港線関係第三次調査) 吉野ヶ里遺跡群 本告牟田遺跡

一九七七年以前出土の木簡(二〇)

平城宮跡(第四四次)

中世木簡の一形態——山札・茅札についての覚書——

石井 進

雲夢睡虎地秦墓竹簡「日書」より見た法と習俗

工藤元男

木簡の保存処理

沢田正昭

彙報

『木簡研究』六～一〇号総目次

研究集会報告一覧

木簡出土遺跡報告書等目録

寺崎保広

木簡出土遺跡一覧

寺崎保広

頒価 三八〇〇円 千五〇〇円